

# 在宅療養者への感染予防対策

～感染予防対策マニュアルの見直しを通して～

訪問看護ステーション新ことに

浅川 悦子<sup>1)</sup> ・ 木浪 江里子<sup>1)</sup>

1) 看護師

## 1. はじめに

訪問看護ステーションの利用者の多くは、高齢者、人工呼吸器やカテーテルなどを装着した医療依存度の高い人である。感染に対する感受性は非常に高く、易感染者と言われている。つまり、健康な人では問題にならない病原性の弱い細菌により日和見感染を起こす可能性がある。また、訪問看護師は通常一日に何軒かの家庭を訪問しており、感染の媒体になりうるということが指摘されている。

今回、私たちは、訪問看護ステーションの感染予防対策を今一度、考察し、感染予防対策マニュアルを見直す事にした。その結果、改めて手洗いや手指の消毒等の必要性を再認識し、また、同時に配慮不足によって起こり得る危険性も見逃してはならないことに気づくことも出来たため、ここに報告する。

## 2. 感染予防対策マニュアルの見直しにあたって

既存するマニュアルを熟読し、理解にあたり充分と思われる項目は残し、不足と思われる項目に関して、補足したり、見直したりすることにした。

- 1) 目次がないので目次のページを追加した。
- 2) 感染の捕らえ方である感染の3要素（「病原体」「感染経路」「定着・増殖」）などを盛り込むことにした<sup>1)</sup>。
- 3) 感染の3要素と在宅においての感染予防対策の実際についての項目を追加した。

\* 「病原体」に対しては取り除くか、死滅させる。

\* 「感染経路」に対しては遮断する。

\* 「定着・増殖」に対しては身体への定着・増殖を阻止する。

4) 手洗いの重要性を再認識したため、既存の「手洗いの手順」はそのまま残し、スムーズな手洗いを在宅で行なうためのアイデアなどを新たに追加した。

初回訪問時に手洗いが必要な事を説明する。

手洗いするタイミングを見計らう・逃さない。

ケアの前の手洗いがポイント「手洗いは療養者を護る為」と療養者にも理解していただく。

どうしても手洗いできない時は、ケアのプロとして、療養者と家族に手洗いの必要性を説明し続ける。

手洗いできなかった場合はウェットティッシュやアルコール綿などで汚れを拭いた後に、ヒビスコールなどの擦り込み式消毒液で良く消毒し、次の療養者宅で必ず十分に手洗いする。

訪問ルート途中の公園やテナントビルのトイレなど、手を洗えるポイントを把握しておく。

5) 感染予防対策の注意とポイントを「場面」「具体例」「対策」の項目別に表として追加した。

6) 手洗いの仕方など、一部内容が重複するところがあるが、定着と理解を深める為に、削除せず、そのまま残すことにした。

### 3. 考察<sup>2)</sup>

今回、感染予防対策マニュアルの見直しにあたって、今まで、分かっていると思い込んでいた感染予防対策の中にあいまいな部分をそのままにしながら、日々の業務を行なっていたことに気付いた。

例えば、成人の場合、麻疹、水痘などに関しては、免疫が大抵成立しているので、免疫状態が低下している療養者でなければ感染の問題はないとされている。しかし、同居または、遊びに来ている家族の中に、乳幼児がいる場合には、訪問前後の手洗いはもちろんのこと、更にごうがいも加えなければならない。

このように、在宅療養者の感染源、感染経路は療養者や家族自身の皮膚常在菌、糞便、尿であることが多く、通常、複数件の訪問を行い、直接それらに関わる看護師が感染の媒体となる危険性が高い。感染症の有無を問わず、訪問前後の手洗い、うがい、ケア前後の手洗いを実施する事が必要である。

療養者の住居環境によっては訪問先で手洗いが出来ない場面もあり、適宜、状況にあった手指消毒を実施する為に、ウェットティッシュと摩擦式消毒液を常に携帯する事が重要であると実感した。

また、自己管理として、訪問看護師が感染源にならないためには日頃の健康管理が大切であり、具体的には疲労を残さないように睡眠時間の確保やストレス解消、健康的な生活習慣を維持する事、外出後のうがい手洗いの施行、積極的な予防接種などを行なう事が必要である。

更に感染予防は、療養者、家族に関わる介護者、全てが一体となってあたらなければ成功しない為、看護師が中心となり、指導、協力を得る事が使命と考える。

そして、心構えとして、慣れでおざなりな手洗いをしないように、改めて基本に従い適切な手洗いの実施を心がけるようになった。こうした確実な手洗いを施行する為、移動時間などに余裕を持った訪問業務を実施することを心掛けたい。

今回、研究を進めていく中で、再認識できたことが、ユニバーサル・プレコーションとスタンダード・プレコーションである。この考え方をステーションにもっと浸透させ、より具体的に展開してゆく必要があると思う。

### 4. おわりに

今回、この研究を取り組むことによって、確実に手洗いをしなければならないことや、療養者はもちろんのこと、その家族にも感染予防対策が必要であることなどが浮き彫りになり、感染予防対策における訪問看護師の役割や心得が深まったことを実感した。

また、在宅にこだわって、マニュアルを見直した結果、基本を理解していれば、その実施場面が、病院などの施設であれ、在宅であれ、十分に感染予防対策の実施が可能である事に気付く事も出来た。

在宅における感染予防対策を展開する為には、全ての過程において常に感染の危険性があることを認識し、日常の訪問看護にあたり、正しい情報を收拾し、得られた知識を実践出来るように日頃から訓練を行い、制約があり限られた条件の中でも、最大の効果が得られるように努める事が大切であることを感じた。また、定期的に感染予防対策の勉強会や、マニュアルの見直しなどを行うことが、職員教育や啓蒙活動につながってゆくのではないかと思う。

これからも、初心を大切に、基本に立ち返りながら、看護の質を高め、感染予防対策に日々努力してゆきたいと思う。

文 献

- 1) 日野原重明ら編：看護・医学事典第 5 版 .  
医学書院，東京，1992
- 2) 医療法人西陣健康会 堀川病院看護部：  
老年看護・訪問看護のポイント．メディカ  
出版，大阪，pp211-225，2003